

### \* レプソルド子午儀の発見された対物レンズの5つの根拠の整理

アーカイブ室新聞はすでに495号になった。筆者が国立天文台でアーカイブの仕事にのめり込む原因になったレプソルド子午儀(1880年にドイツで製作され、海軍省観象台が購入し、東京天文台発足時に東京天文台に移管された当時の基幹望遠鏡)(写真1)について、



写真1

アーカイブ室新聞に今までどんなことを書いたか振り返ってみた。レプソルド子午儀発見に関する記事はアーカイブ室新聞第1号(2008年4月8日)、第2号(2008年4月15日)以外には全くないのである。考えてみればアーカイブ室は2008年4月発足で、その頃からアーカイブ室新聞を書き始めた。アーカイブ室新聞第2号に「対物レンズを取り付けたところ、鏡筒の筒先にあった本来のレンズカバーがぴったりとレンズホルダーにはまった。このこともこのレンズがレプソルド子午環のものという証拠の一つになる。」という記述がある。これはまさしく、今回書こうとしていることの一つである。既に3年以上前に記事にしたことであるが、今一度、写真を添えて

証左しておきたい。レプソルド子午儀を発見したのは、2007年4月から国立天文台の公開エリアを拡大した事業に参画した時であり、レプソルド子午儀発見に関する記事は天文月報に書いた。天文月報2008年3月号に「レプソルド子午儀、連合子午儀発掘・復元奮戦記」、天文月報2008年8月号に「集心儀という言葉(レプソルド子午儀復元余話)」という記事の2件である。レプソルド子午儀を発見したのは2007年であったからもはや4年も前の事になってしまった。レプソルド子午儀を発見した時、その筒先には対物レンズがなかったのである。そこで天文台の中を探索していたところ、レプソルド子午儀の対物レンズと思われる口径13.5cm、焦点距離214cmと書かれたレンズが太陽グループの資料が保管されて

いる棚にあった。しかし、そのレンズにはレプソルドの名盤がなく、STEINHEIL IN MUNCHEN No. 58999 の刻印（写真 2）があった。



写真 2

このレンズが、レプソルド子午儀の対物レンズと思われる根拠は 5 つある。

- 1) 口径が 13.5cm
- 2) 焦点距離が 214cm
- 3) 取り付けのねじ穴が望遠鏡筒先のねじ穴とぴったり
- 4) レンズホルダー外側の縁が望遠鏡筒先に残された蓋にぴったり
- 5) レプソルド社はシュタイハイルのレンズを他にも用いている

これだけ状況証拠が揃えば、口径 13.5cm のレプソルド子午儀本体、口径 13.5cm シュタイハイルのレンズ、そして上記 5 つの根拠があるのではや疑う必要はなかろう。写真 3 がレプソルド子午儀にシュタイハイルのレンズを装着したところ、写真 4 が筒先の蓋を被せたところである。

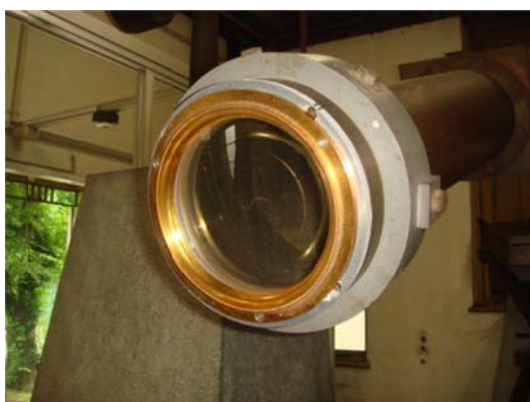


写真 3 シュタイハイルのレンズを装着



写真 4 筒先の蓋を装着

これでレプソルド子午儀はほぼ完全に復元できたことになる。

今回、レプソルド子午儀の対物レンズについて記事にしているのは、2007年当時レプソルド子午儀を発見した時点では、この望遠鏡の対物レンズが行方不明で、その後、レプソルド子午儀の対物レンズを発見したことは大きなニュースであり、アーカイブ室新聞にあるはずだと、アーカイブ室新聞を見直してみたが、この発見を表題した記事はなく、アーカイブ室新聞の1号、2号の中に埋もれた形でしかなかった。そこには、4月3日（木曜日）：レプソルド子午儀の対物レンズ（口径135mm、焦点距離：2140mm）らしきものを発見、元太陽物理の管理下であり、旧図書館の戸棚にあった。中桐はこのレンズ検索のために奔走し、天文台0Bに消息を尋ねる手紙を書きまくっていた、あるいは4月4日（金曜日）：発見されたレプソルド子午儀の対物レンズと思われるものを、レプソルド子午儀望遠鏡本体の筒先にあてがって見たところ、取り付けビス穴はぴったりと一致したが、レンズホルダーが鏡筒にぴったりと入り込まず、少し浮いた状態になる。どうやらアダプタリング1個が行方不明になっているようだなどという表記はあるが、アーカイブ室新聞としてはレプソルド子午儀の対物レンズ発見は表題に表したいと思った次第である。

これらアーカイブ室新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp